慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	言語知識のメカニズムの解明：日本語相互表現をめぐって
Sub Title	
Author	小町, 将之(Komachi, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004.) ,p.101- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成15年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言語知識のメカニズムの解明
——日本語相互表現をめぐって——

小　町　将　之*

1. はじめに

本研究は，認知機構としての言語機能における意味部門の性質と，他の認知機構との関わりを調査するプロジェクトの一環である[i]。

伝統的な意味論研究において「合成原理」と呼ばれる作業仮説がある。これは「文の意味は，その部分の意味の合成から得られる」というものである。このような仮説を設定する背景には，人間が有限の手段によって無限の文を理解するということが考慮にあるはずだが，伝統的な意味論では，整合的な理論を構築することに関心が集中して，その認知科学的位置づけは必ずしも考慮されてこなかった（例えば，Davidson 1967)。そこで本研究では，認知機構としての言語機能がどのように文の意味を処理するのか，という問題意識に基づき，言語機能の，特に意味部門の性質を解明することを目標とした。具体的には，いわゆる相互表現を含む文（これを「相互文」と呼ぶ）と相互関係を表す意味（これを「相互性」と呼ぶ）の関係から，意味部門においてどのような解釈関数が必要かを，合成原理の果たす役割と意味部門の認知機構群における位置づけとともに議論した。

2. 相互表現と相互性

日本語では，(1a) の「合う」や (1b) の「お互い」が相互表現とされている。

(1) a.　（バーで）男たちが殴り合った。
　　b.　（バーで）男たちがお互いを殴った。

状況としてもっとも単純な，「男たち」が 2 人の場合を考えると，どちらの文の解釈も，「両者に殴る相互関係が成り立っている」というものである。しかし，3 人以上の場合，(1a) では，「男たち」の中で部分的に相互関係が成り立てばよいのに対し，(1b) ではすべての「男たち」に相互関係が成り立たねばならない (Nishigauchi 1991)。つまり，一括りに相互表現といっても，意味する相互性は表現によって変わり得る[ii]。

さらに，相互文であっても，相互性を表さない場合もある。

(2) a.　太郎と次郎がお互いを売り込んでいた。　(Hoji 1997)
　　b.　ジョンとビルがメアリーを招待し合った。(Nishigauchi 1991)

(2a) は「太郎と次郎がそれぞれ自分を売り込んでいる」という意味であり，(2b) は「ジョンがメアリーを招待し，ビルがメアリーを招待する」という意味である。これらの解釈に相互関係は含まれていない。

これらの観察でわかるのは，相互文の意味する相互性は必ずしも斉一的ではないということと，相互文は必ずしも相互性を意味しないということである。

3. 相互性の扱いについて

相互性についてまず考えるべきなのは，相互性専用に解釈関数を用意する必要があるかどうか，であ

る。これに肯定的な立場が Dalrymple *et al.* (1994) によるものである。この立場では，入力に相互文を取り，相互性を出力する関数を想定する。意味部門は相互性を解釈するためだけの原子的な関数を用意しなくてはならない。この扱い方では，相互文を一括して相互性に結びつけるため，非相互的な解釈があることを捉えることはできないし，相互文によっては意味の違いが生じることを捉えることもできない。

Heim *et al.* (1991) は，Dalrymple *et al.* とは異なり，相互性を他の解釈関数の合成によって導いている。彼らは英語の "each other" の分析を通じて，相互性が "each" 解釈関数と "other" 解釈関数から成り立つことを提案した。この分析がうまくいくとしても，Heim *et al.* の方式があらゆる相互表現に一般的に成立するのか，という問いが生じる。もし，単一の分析をあらゆる相互表現に適用しようとすれば，斉一的に扱うことになり，相互文によってはその相互性が異なりうることを捉えることができない。

ここでの問題は，相互性を意味部門で有意義な概念と捉えていることにある。相互表現によってはその意味するところが異なったり，別の解釈関数が関わっているにすぎないのであれば，意味部門において「相互性」という統一的な概念を設定する必要はない。また，認知機構群が全体として文を解釈するメカニズムに貢献していると考えたとき，言語機能の意味部門だけが相互性の解釈に寄与していると考える必要はなく，他の，思考に関わる認知機構が，意味部門（あるいは言語機能）からの出力を受けて総合的に解釈する，という可能性を探ることが可能である。相互文の意味はそれが含む要素の意味に依存する，という点だけが残り，意味の構成は，相互表現によって異なり得るという可能性が示唆される。

そこで次節では，日本語の相互表現を手がかりに相互文の意味の導き方を考察する。

4. 日本語「あう」

日本語「あう」文の相互性の導出に関して，Ishii (1990) は，対称述語としての「会う/合う」の意味が反映されていると提案している。(3a) における相互性は，(3b) や (3c) に見られる，ある種の対称性が反映されたものだとする考えである。

(3) a. 太郎と花子がたたき合う。
　　b. 太郎と花子が会う。
　　c. 二人の意見が合う。

Komachi (2003) では，(3a) の相互表現が複合動詞としての性質をもつことを観察し，対称動詞の「会う/合う」が動詞複合によって，その対称性を動詞句全体に反映させていると提案している[iii]。

このように対称動詞の「会う/合う」と相互動詞「合う」を統一的に扱おうとすれば，「あう」が項に取るのは名詞句か動詞句か，ということが唯一の違いになる。構造的には，「あう」は非対格動詞として，内項に名詞句を取る場合と，複合動詞の後部要素として内項に動詞句を取る場合とに分類できる。このとき，(4) に例示される解釈関数を想定する。出力は，それぞれの文で意図される意味である。

(4) a. あう（[$_{動詞句}$ 太郎と花子がたたく]）: (3a)
　　b. あう（[$_{名詞句}$ 太郎と花子]）: (3b)

以上の分析がうまくいく限りにおいて，「あう」文の「相互性」は「あう」の対称性に還元され，相互性専用の解釈関数，あるいは相互性専用の合成的関数を用意する必要はない。この分析では，(2b) の非相互的な解釈も，「メアリー」を軸に「ジョン」と「ビル」に対称的な関係が成り立つものとして捉えることが可能である。このような利点は，合成原理を保持し，相互性の概念を意味部門から除去することに

よって可能になっている。

5. まとめ

本研究における議論で明らかになった知見は，相互性という概念そのものは，少なくとも，言語機能外の他の認知機構に帰属されるべきものであり，意味部門においては，合成原理とともに，それらを導出する関数が用意されているだけでよい，ということである。このことは，他の認知機構との関わりを考慮に入れることで，意味部門の性質がより明らかになることを意味している。

注

i) 本研究をすすめるにあたって，大津由紀雄先生，鈴木猛先生，磯部美和先生に大変お世話になった。

ii) 相互表現が同じでも，共起する述語や発話される状況によっても，解釈は変わり得る。Langendoen and Magloire (2003) は，さまざまな種類の相互性の特徴づけを行っている。

iii) Komachi (2003) では，これらのさまざまな「あう」同士の関係が明確でなかった。ここでは，「あう」とは抽象的な対称性だけを表す動詞と捉えている。それらの具体的な現れとして「会う」，「合う」，「逢う」あるいは「(動詞＋)合う」などの形があるということである。したがって本動詞の意味のあらゆる側面が相互的用法に現れるとは限らない。この点に関して，北原久嗣先生，杉崎鉱司先生，William Snyder 先生との議論が大変参考になった。

参考文献

Dalrymple, Mary., Sam Mchombo, and Stanley Peters. 1994. Semantic similarities and syntactic contrasts between Chichewa and English reciprocals. *Linguistic Inquiry*, **25**, 145–163.

Davidson, Donald. 1967. Truth and meaning. *Synthèse*, **17**, 304–323.

Heim, Irene., Howard Lasnik, and Robert May. 1991. Reciprocity and plurality. *Linguistic Inquiry*, **22**, 63–101.

Hoji, Hajime. 1997. *Otagai*. ms.

Ishii, Yasuo. 1990. Reciprocal predicates in Japanese. In *Proceedings of Eastern States Conference on Linguistics 6*, Ken deJong and Yongkyoon No (eds.), 150–161.

Komachi, Masayuki. 2003. *Japanese Reciprocals and Typological Considerations*. MA Thesis, Keio University.

Langendoen, Terence D. and Joël Magloire. 2003. The logic of reflexivity and reciprocity. In *Anaphora: A Reference Guide*, Andrew Barss (ed.), Blackwell.

Nishigauchi, Taisuke. 1992. Syntax of reciprocals in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, **1**, 157–196.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

構音抑制が単語の対連合学習に与える影響

佐々木　尚*

単語の対連合学習課題は，記憶実験が始められて以来，長く使い古されてきた課題である。しかし，この課題は，世の中の様々な現象を実験室内で表現するのに適している課題でもある。例えば，人の名前や第二言語の語彙，科学の元素記号のような何かの名前を学習することと対連合学習課題は類似しており (Sweller, 2003)，そのため，語彙学習の研究において，単語の対連合学習の実験パラダイムはよく利用されてきた。